

逸る。今の内に存分に触れておきたいと言う欲が増していくばかりで、触れる手にもつい熱が入ろうというものである。

「…意地悪をしてるつもりはないんだがな」

そんな事を言いながらも、触れる手を止める事はない。中途半端に引つかかっている夜着を肩から落として、寝台の下に追いやる。

柔らかな胸元から続く滑らかな薄い腹部を辿って、順に指と唇を滑らせる。そうして辿り着いた淡い繁みの奥に指を忍ばせると、僅かな抵抗もなくつぶりと指が呑み込まれるのを感じて、玄徳は薄く笑んだ。

初めてこの身体を抱いた時にはまだ固いばかりだったと言うのに、今はこんなにも熱く潤んで、玄徳を待ちかまえている。自分が花開かせたのかと思うと更に堪らない気持ちにさせられて、艶やかに咲き誇る様子について目を奪われてしまう。

「…花」

彼女の膝を腕に掛ける様にして寝台に手をつくすと、自然と足が開く形になって秘部が上を向く。そこに熱く勃起上がりきっている己をずりりと擦り付けると、花の腰が誘うように揺れた。

「…や、こんな恥ずかしい…っ」

「可愛いな、花は」

身を振って顔を赤くする花に、ますます煽られてしまつて。

だから、ついで承も得ない内に、熱く潤んで玄徳を待ち構えているであろう胎内に己を埋めてしまった。

「……っ！」

突然の挿入に花が息を呑むのが伝わる、けれども熱く滑って玄徳を迎え入れるその誘惑に抗える筈もなく、自分の意志とは関係なく腰が勝手に律動を刻み始める。

「…あつ、やつ…！急にそんな……っ」

「……花っ」

驚いた拍子なのだろうか、きゅうつと締め付けられて玄徳の口からも熱い吐息が零れる。堪らずに、膝を抱え直してそのまま激しく突き上げてしまう。

「やあつっ！」

まるで悲鳴のような声があがるも、こうなつてしまつては、己の内の熱情を吐き出すまでは、もはや動き出した身体を止める事など出来なかつた。

*

ふと、花が目を開くと目の前には玄徳の心配そうな顔があつて。大丈夫ですよと伝える代わりに、怠い腕を持ち上げて玄徳の頬に触れると、その手を取られて平の方に口付けられた。その感触がくすぐつたい。

「…すまない、ちよつと急ぎすぎたな」

「いえ、そんな…」

大丈夫ですよと答えると、額に口づけが落ちた。そのまま目元や頬にも軽い口づけが落とされる。心地良い疲労感に身を任せてうとうとしかけると、耳元で艶のある低音が響いた。

「今度は、お前もな」

「…え？…あ、んっ？！」